

博士学位論文審査要旨

2018年7月17日

論文題目： 19世紀デンマークにおけるディアコニア思想
—ハラルド・スタインの場合—

学位申請者： 森本 典子

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 社会学研究科 教授 木原 活信

要 旨：

本論文は、19世紀中葉のデンマークにおけるディアコニア運動に大きな足跡を残した福音主義ルター派牧師ハラルド・スタインのキリスト教思想とその実践について究明したものである。

序章で問題の所在、課題と方法について記述した後に、第1章ではディアコニアという用語について、新約聖書、古代教会、宗教改革期における用法を概観した上で本論文に利用するこの用語の概念規定を試み、またその視点から従来の研究を瞥見する。

第2章は、19世紀のデンマーク社会ならびにキリスト教会の状況を叙述する。ナポレオン戦争の敗北、絶対王政の崩壊、新憲法の成立という激変する社会の状況、さらに産業革命を背景にして農業従事者が首都デンマークに大量に移り住むことによって生じた生活困窮者の増大という課題に対応しきれない教会の状況の中で、スタインがドイツのディアコニア運動の刺激を受けて活動を始める経緯に光が当てられる。

第3章では、スタインの活動を残された二つの伝記類に基づいて概観し、第4章では、デンマーク・ディアコニッセ事業団(DST)でのスタインの活動を追跡する。そして、それ以降の彼の活動の基線となったディアコニア理解を整理する。また、DSTでの職を辞する直接の引き金となったいわゆる「ヴィボー事件」を取り上げ、召命という「聖」の次元と伝統的な「性」の理解をめぐって現場のディアコニッセたちとの間で生じた齟齬と軋轢が指摘される。

第5章では、DSTから枝分かれしたコペンハーゲン内国伝道教会協会理事(長)の時代の、後に書籍としても出版された8回にわたる講演や彼の説教に基づいて、キリスト教的な愛の活動として「助け守る」「解放する」「痛みを和らげる」ことを強調し、また身体的救済だけでなく霊的救済をも念頭に置いたスタインのディアコニア思想を論述する。

終章では、17～18世紀に神と個との関係を重視して既存の教会に批判的姿勢を示したドイツ敬虔主義、ならびに敬虔主義を背景にして成立した19世紀信仰覚醒運動からスタインが刺激を受けていたこと、しかし、その既存の教会共同体の全体を包摂すべきものとしてデンマークにおける彼のディアコニア運動が展開されたことが指摘され、現在のデンマークの教会の社会事業にスタインが開拓したこの運動が継承されていることが確認される。そして、従来は等閑視されてきたデンマークの教會的社會事業の原点の一つがここにあることが指摘される。スタインの実践的活動の土台である「救済」「義認と聖化」「ことばとわざ」「召命」の理解など、彼の神学思想についてはさらに詳細な解明が求められるものの、現代世界において注目されるデンマーク社会福祉事業の原点ともなり得るスタインの思想をデンマーク語原典資料を駆使しつつ解明した本論文の功績は大きい。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2018年7月17日

論文題目： 19世紀デンマークにおけるディアコニア思想
—ハラルド・スタインの場合—

学位申請者： 森本 典子

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 社会学研究科 教授 木原 活信

要 旨：

博士学位請求論文を提出した森本典子氏に対して、神学研究科は2018年7月9日18時30分より2時間、神学館会議室にて総合試験を実施した。19世紀デンマークのキリスト教社会事業、とりわけディアコニア運動について、またその神学的背景について森本氏は十分な知見をもっていることが確認された。デンマーク語での原典研究ならびに現地調査に見られるように、必要な外国語の素養を十分に有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 19世紀デンマークにおけるディアコニア思想
—ハラルド・スタインの場合—

氏名： 森本 典子

要旨：

本論文は、19世紀のデンマークにおいてディアコニッセ及びディアコニアの働きを当時のデンマーク社会に周知させることに尽力したハラルド・スタイン(Harald Stein)のディアコニア思想に光を当てることを目的とする。

序章では、当時のデンマーク社会の状況に触れ、問題の所在を明らかにし、研究の課題と方法を定める。

産業革命が押し寄せた19世紀のデンマーク社会は、時を違わずして絶対王制から立憲君主制へと社会制度が変更され、新憲法が施行された。これにより、従来国教であったキリスト教が廃止され、宗教の自由が保障された。多くの農業従事者がより豊かな生活を求めて都会へと移住したが、十分な生活の糧を得ることができず、住環境も劣悪だった。しかし、地方から移住してきた人々に従来のような地域におけるネットワークはなく、教会が拠り所ともならなかった。社会主義がデンマークにもたらされたのもこの様な時期であった。

スタインは、このような混乱を極めたデンマーク社会において、キリスト教の伝統であるディアコニアの働きにより教会の活性化を試みた人物である。彼が提唱したディアコニアの働きの多くは、後に国民教会はもとよりデンマーク社会でも実現された。しかし、当時のデンマーク社会においてスタインの思想や試みは十分に理解されることがなかったため、デンマークでディアコニアを語る際に彼の名前が登場することは稀である。それ故、デンマークにおいてもスタインに関する十分な研究がなされているとは言い難い。

本論文においては、スタインの著作や説教集、講演集をもとに彼のディアコニア思想とその背景を紹介し、彼が目指したものを考察する。

第1章ではディアコニアという言葉とディアコニア研究についての案内をする。

ディアコニアという単語は、新約聖書の中に登場するギリシャ語単語であるが、歴史の変遷の中で聖書に登場する単語とは別の意味が与えられ、理解されるようになった。そのため、ここでは先ず、ディアコニアという単語が、現在のキリスト教においてどのような意味として紹介されているのか、また、どのように定義されているのかを紹介する。その後、本論文においてどのような意味でディアコニアという単語を使うのかを定める。次いで、ディアコニアを巡る研究を瞥見する。ディアコニアに関する研究はまだ歴史が浅く、歴史研究においては実践を紹介するものが多い。また、統一した定義がないと言われ、研究者それぞれの関心によってアプローチの方法が異なる。そのため本論文では、ディアコニアとはどのようなものなのかという理解の手がかりとなるような研究を数例紹介するにとどめる。

第2章では、19世紀のデンマークとキリスト教についての全般的な案内をする。

とりわけ19世紀前半のデンマークは、産業革命の波が押し寄せ、ナポレオン戦争の敗戦により混乱を極めた。そのような中、国民の自由を求める機運が高まり、絶対王制が崩壊し、新憲法

が制定されたのであった。更に、社会主義がもたらされ、デンマークには新しい価値観が次々に生まれていったが、キリスト教会はその時代の変化に充分に対応することができなかった。特に、地方の農業従事者がよりよい生活を求めて移住してきた首都コペンハーゲンでは、地域とのつながりのない生活困窮者が増加した。このような状況が続く中、キリスト教会は地域福祉の担い手としての役割も求められていた。しかし、生活困窮者が多く住む地域では人口に対し教会の数も充分ではなく、支援者も少なかった。このようなデンマークの社会状況についての知見を広げることは、スタインのディアコニア思想を理解するうえで欠かすことができないものである。

第3章では、ハラルド・スタインの生涯を紹介する。

スタインの生涯に関する文献は乏しく、彼自身が自伝として書き残したメモを彼の甥が本として纏めたもの、そしてデンマーク・ディアコニッセ事業団(Den danske Diakonissestiftelse 以下、デンマークの慣習により DST と略)の記念誌にまとめられたものが残っているだけである。限られた文献、それも、その多くがスタイン自身によって残されたものであり客観性を欠く恐れもあるが、スタインの生涯を知ることは、当時のデンマーク社会を知ると同様に彼の思想背景を理解する上で重要である。

スタインは比較的裕福な家庭に育ち、多感な青年期には学校や父の職場の人々、そして外国旅行などにより様々な刺激を受けた。そして、これらの経験が彼を神学の道へと導いた。大学卒業後は、悩んだ末に牧師の道を歩む決心をした。彼の牧師としての働きは常に順調であったとはいえないが、DST の牧師として、コペンハーゲン内国伝道教会協会(以下、コペンハーゲン伝道協会と略)の理事として、そして、生活困窮者の多く住む地域に献堂された聖マタイ教会の主任牧師としてディアコニッセとディアコニアの働きを周知させることに尽力した。しかし、聖マタイ教会での働きに体力的、精神的な限界を感じていたところにフン島監督の招聘を受け、その召しに応じたのであった。

スタイン自身が、その手記において自らの生涯を総括した記録はない。しかし、彼に直接触れた人々が、彼の人となりを書き記したものからは、不器用ながらも思いやりのある人となりが見える。

第4章と第5章では、このようなスタインがどのようにディアコニアを語り実践したかを、彼の著作、説教、講演から紹介する。また、その背景を理解するために必要に応じて彼が関わった団体や人物も紹介する。

第4章では、スタインがホルメン教会で牧師補であった時代から DST の牧師として働いていた時代までの著作、説教、講演からスタインのディアコニアを紹介する。

特に、スタインがまだホルメン教会の牧師補であった 1872 年に著した『女性キリスト者の歴史に関する小冊子—ディアコニッセの事柄の推進のために—』(Nogle Blade af den kriste Kvindes Historie - Et bidrag til Diakonissesagens Fremme -、以下、『小冊子』と略)は、主に初代教会からのディアコニッセの歴史を記したものであるが、スタインのディアコニア思想の基礎となるものと言える。本章では、この『小冊子』の他に、1872 年から 1874 年までの DST の年報におけるスタインの報告、DST 牧師就任後の 1875 年に開催した講演会の記録である『福音教会においてディアコニッセとなることはいかなることか』(hvad vil det sige at være Diakonisse i den evangeliske kirke)、そしてスタインが DST の牧師を辞任する引き金となったヴィボー事件を紹介する。このヴィボー事件においては「召命が業を聖くする」というスタインの見解とディアコニッセの「品位に関わる」見解とが対立した。この事件でスタインとディアコニッセとの見解は一致を見ることがなく、スタインが DST を辞職する結果となった。

第5章では、『内国伝道協会の目的とは 信仰と愛における働きについての 8 度の講演』(hvad

vil den indre Mission ? Otte Fordrag om Tro, virksom i Kærlighed、以下、『講演集』と略)、伝道センターベテスタ落成式におけるスタインの講演、そして聖マタイ教会教区援助会の家落成式におけるスタインの説教を紹介する。

特に『講演集』は、コペンハーゲン伝道協会の働きを活性化させるために開催された8度にわたる連続講演会を一冊の本に纏めたもので、スタインのディアコニアプログラムとも呼ばれる。ここでスタインは、ディアコニアを「助け守る愛」「解放する愛」「痛みを和らげる愛」の三分野に分類し、そこにおいてディアコニアが身体的救済のみならず霊的救済を目指すもの、即ち、全人的なものであることを示した。この『講演集』は『小冊子』同様、スタインのディアコニア思想の中核をなすものと考えられる。

終章では、第4章と第5章で得た知見をもとにスタインのディアコニア思想を考察する。

まず、敬虔主義、信仰覚醒運動、内国伝道運動からスタインのディアコニア思想を考える。スタインは、デンマーク内国伝道教会協会の提案により設立されたコペンハーゲン伝道協会の理事であった。しかし、デンマーク独自の内国伝道運動とは意見を異にしたため、理事を辞任することになった。ただ、内国伝道運動の下地となった敬虔主義的思想の片鱗をスタインのディアコニア思想に見る事ができる。その一方で、神と個の関係を重視する敬虔主義と教会共同体を重視するスタインとでは基本的な思想が異なるとも言えるのである。

次いで、スタインのディアコニア思想と社会主義との関係を考察する。ここでは、特に『講演集』から、スタインが社会主義をどのように理解していたのか、また、当時の社会状況をどのように見ていたのか、キリスト教と社会主義の関係をどう捉えていたのかなどを考える。

以上のことから、スタインのディアコニアとは、社会的弱者と呼ばれる人々のために実践される全人的、即ち身体的、霊的支援であり、義認と聖化の出発点であったということを確認した。そして、この様なディアコニアは、教会共同体に活力を与えるものだとスタインは確信していた。彼は、教会共同体においてディアコニアの働きを実践することにより、教会を活性化させることを目指したとののである。